松島健氏の「臼杵磨崖仏の成立試論」（『国華1215号』掲載）を批判的に検討する

仲　嶺　真　信

はじめに

『国華1215号　特輯　日本の石仏』[1]における松島健氏の論文には、論理的な整合性に欠けた部分やいくつかの矛盾点が散見される。貴重な臼杵石仏の成立に関わる試論ではあるが、筆者がすでに松島論文以前に、『臼杵石仏』[2]及び『仏教芸術229号』[3]おいて展開した見解にも一切触れられていないのはまことに不可解である。

ちなみに、同氏は、『臼杵石仏』所収の飯沼賢司氏の論文を引用しているので、せめて同書掲載の拙論に対して何らかの批評は可能なはずだが、しかしそれが一切ないのは残念である。同氏は、拙論に眼を通す時間的余裕が全くなかった訳ではあるまい。本論では、以下に同氏の論説を批判的に分析しながら、臼杵石仏の成立に関わる諸問題について再検討を行いたい。

一　仏龕ごとの検討

1）ホキ石仏第一群

①第一龕（図1）

仏龕には、如来三尊とその左右に菩薩立像一対を安置しており、如来三尊はそれぞれ裳懸座に坐す。中尊の如来は、右手を胸前で挙手、左手の掌を表にして膝上に置く偏袒右肩像で、尊名は正確には不明であるが、如来三尊の構成と他の尊像の特徴などを勘案し、旧来の説に従えば釈迦と推測される。松島氏は、正法の教主釈迦如来を主尊とした三仏並坐像である可能性が大きいと見る。この点は卑見においても首肯される。

すなわち、左脇の如来は、他説同様、その印相から偏袒右肩の定印阿弥陀と推測される。また右脇の如来は、右手を胸前で挙手、左手の掌を表にして膝上に置く通肩像で尊名は正確には決めがたいが、従来より薬師と見る説がある（前掲『臼杵石仏』参照）。

これらの像容について、松島氏は、表題の論文において次のように言及している。すなわち、「（前略）第一龕の三仏相互の間には、第二龕のような差違は見られないが、顎を突き出した上向きの顔や平板な上体から衣文の単調な彫りなど、その造形力は格段に劣る。おそらく在地仏

師が第一龕を学びつつ造立したものであろう。(後略。以下、下線部は仲嶺)」

まずは、前記下線部の「第一龕」という表記は明白な誤りで、「第二龕」と書き換えるべきである。そうでなければ、文意に整合性が見られない。確かに同氏の指摘にも見られるように、造形力は隣接する第二龕と比べれば、幾分劣ることは否めないし、作者が違うものと考えられる。この点について同氏は、在地仏師との関わりを示唆されているが、その可能性は十分あろう。

ところで、この仏龕の造営時期について、同氏は次のように述べている。すなわち、「(前略) 石仏と五輪塔とは一連の造営と考えられ、ホキ石仏開鑿の完成の時期を示唆する有力な傍証として改めて注目される。(後略)」これは旧来の他説を繰り返している訳だが、至当のことである。既に拙論でも指摘したとおり、覚鑁によれば、五輪塔と大日は同体であり、大日如来の三昧耶形が五輪塔と説かれる。したがって、いわゆる中尾五輪塔銘に「千部如法経願主遍照金剛□□」とあるが、この部分には造営の謎を解く重要な鍵が秘められている。特に「如法経」の文字は重要であり、すなわちこれは「法華経」を示し、その読誦・講経・書写などに専念した者が「持経者」と呼ばれていたことが知られている。彼らは、六波羅蜜寺の空也のように既存の教団から離れたいわゆる「聖」として活躍していた。管見では、このような「聖」の勧進との関わりの中で、臼杵石仏群の開鑿が行われたものと推測される。おそらく、東密と台密の総合化を図った覚鑁の五輪塔信仰を受けて造営は進められたものであろう[4]。

②第二龕(図2)

この仏龕の如来三尊は、それぞれ裳懸座に坐す。第一・第二龕間に、特有の壷型敷茄子上の蓮華座に坐す愛染明王がその特徴(弓・矢・獅子冠)を持って確認される。

第二龕の中尊の如来は、像容と印相から偏袒右肩の定印阿弥陀と考えられる。左脇の如来は、右手を胸前で挙手、左手の掌を表にして膝上に置く偏袒右肩像で、尊名は手がかりが少なく明確にしがたいが、従来の説は釈迦と見る。一方右脇の如来は、細見すれば通肩像と分かる。尊名は特定しがたいが、右手を胸前で挙手し、掌を表にして膝上に置いた左手には、持物の薬壷の痕跡らしきものが認められる。よって、管見では薬師と推測される。この像について松島氏は、薬師であることは確実と断定しているが、磨滅が進んだ状態からは、薬壷とは確定できない。あくまで、薬壷状(?)の隆起した部分が見られるのであり、その可能性が高いと考えられる。

ところで、松島氏が、第一群の中心を第二龕の三尊仏と見定め、さらに最も傑出している像として、その中尊阿弥陀を挙げていることに異存はない。その像容について同氏は「(前略) 定朝様を基本としそこに独特の創意を加えた平安後期の都の名流につながる作風が顕著に窺われる。石という材質ゆえに細部の造りは緻密とはいえないが、その確たる象形のうちに典雅に洗練された造形感覚を見ることは容易なことで、作者は都でも名のある仏師であろう。(後略)」と指摘する。つまり、その評価は、定朝様、都の名流につながる作風、典雅といい、都の有名な仏師を想定する。また如来三尊の「(前略) 中央は造営を請け負った大仏師、左右は彼に従

ってこの地に下向した小仏師が手がけたものかと思えるが、在地の仏師の起用ということも十分にありうるだろう。(後略)」と言及されている。その点に関して、管見も同様である。しかし、この部分はあくまで推測の域を出ないことを確認しておこう。

さらに同氏は、この尊像に近い作例として、以下の尊像を挙げている。すなわち、

仁和寺旧北院本尊薬師如来檀像（康和五 (1103) 年/図３）である。これは円勢と長円の造営になるものであるが、他に円勢風の作例として、安楽寿院石仏（白河上皇の成菩提院から出土という伝承をもつ）を挙げている。ちなみに後者にも、童子を思わせる体躯を持つ点に共通性が見られる。よって円勢一門が、この石仏の造立にも関与した可能性は極めて高いと同氏は見ている。しかし、同氏の指摘のように、仏師円勢が白河上皇の納骨施設の荘厳に関わったという証拠はない。なお同氏は「(前略) 円勢の作風に近いこれらの石仏の存在は当時の都の一流の仏師が石仏の造立にもたずさわっていた事実を示すものとして見逃せない。(後略)」と言及しているが、「当時の都の一流の仏師」が、石仏造営に従事したことを裏付ける資料がある訳でもない。むしろ、それに関しては、かつて否定的な見解が出されている。ここでは清水真澄氏の指摘を紹介しよう。すなわち清水氏は「(前略) いわゆる木仏師と呼ばれる仏像の作者には、石工が彫るように石像彫刻をした例もないし、したとも思えないのである。木造と石造はまったくその技術、道具が違うのは言うまでもなく、まして保守的な院派仏師が石造に携わることはしないであろう。(後略)」[5]と指摘している。要するに、木仏師は石仏を作った例もなく、また造るはずもないという訳であるが、はたして、松島氏の言及された「院派仏師の石仏造営への関与説」は、清水説に対する反論になり得るのだろうか？確かに、かつて前掲『仏教芸術229号』の拙論において指摘したように「当時の都の一流の仏師が石仏の造立にもたずさわっていた事実」はいまだ証明はできない。したっがって、松島氏はあくまで、その蓋然性や可能性の高いことを指摘するにとどめるべきである。ただし、例外として、時代は違うが、江戸期の国東半島の石工が、木仏を彫った例は既に拙論で紹介した。よって、清水説の妥当性の及ぶ範囲に限りはあるものといえよう。

③第三龕（図４）

この仏龕は、智拳印大日を中尊とする如来三尊形式で、中尊を両脇より一段と高く据え、それぞれ裳懸座に坐す。このような「山」の字形の配置例は、古園石仏群や山王三尊像においても共通しているが、諸仏龕の統一性を考慮した結果と見ることができる。あるいは、山王石仏の場合は、「山王」にあやかって「山」の字形を意図したものとも解釈される。この点において、天台仏教との関わりが密接であるといえる。

さて、如来三尊の両端には、菩薩立像が一対ずつ対面する形で配置されている（右脇菩薩像は全身揃っているが、左脇菩薩像は上半身を欠失)。この第三龕に関しては、松島氏は論文中においてあまり触れていない。管見では、中尊に大日、左脇に如来形（釈迦と見る説もあるが特定する根拠は弱い)、右脇は定印の阿弥陀を安置するものと理解している。ちなみに造営時

期は、前期の中尾五輪塔造立以降と推測されるが、幅を考えれば鎌倉初期あたりに及ぶ頃と位置づけられる。

④第四龕（図５）

この仏龕は、地蔵を中尊とする十王群像からなる。中央の地蔵は半跏で台座に腰掛け、右膝部から垂下する裳先が裳懸座形式を作り出して、左膝部の衣褶とのバランスを保っている。松島氏は、この仏龕についても論文中、あまり触れていない。地蔵の両脇にそれぞれ五躯ずつ、合計十王像が整然と配置されているが、右脇部五王像の最も右端の一体だけが横向きに据えられている。その原因について、管見では右隣の第三龕が張り出しすぎたための窮余の一策と推測している。したがって、第三龕に引き続いてこの第四龕が造営されとものと考えている。ちなみに、時期については、西川杏太郎氏の説かれる鎌倉末頃から南北朝にかけての頃と見ても良いが、管見では鎌倉末としても妥当と考えられる[6]。

２）ホキ石仏第二群

①第一龕（図６）

この仏龕は、裳懸座に結跏趺坐する丈六の如来坐像とその左右脇にそれぞれ菩薩立像を安置する。菩薩は各外側の手を屈臂して蓮華を執り、一方、逆の手は垂下して、蓮華座に立つ半丈六像である。中央の三尊像のさらに右端の外側に、全身の磨耗・破損が甚だしく、よって尊名不詳の等身立像二体が残存する。この尊名不詳の二体については、後ほど触れることにするが、かつて筆者は、この丈六如来三尊像に関しては、院覚系統の仏師の関与を想定して考察したことがある。ちなみに、面貌表現に関して、京都・法金剛院阿弥陀坐像（院覚作、大治五 (1130) 年）との類似性が認めれれるので、その関連性について言及した。詳しくは拙著を参照されたい[7]。

さて、松島氏は中尊について、その膝前にて組むかのような手の位置から、ひとまず定印阿弥陀を思い起こさせると述べているが、確かに定印を結ぶ阿弥陀の印相は、密教的見地に立てば、金剛界五仏における妙観察智印の阿弥陀と見ることもできる。したがって、同氏は管見同様に「(前略) 両脇侍の宝冠には観音と勢至の標識が確認されないが、当代の阿弥陀信仰の隆盛からも、本像は阿弥陀三尊像を表したものとみるべきように思われる。(後略)」と言及している。しかし、すぐさま、中尊の両手の構えは、弥勒如来にも共通することを挙げてその可能性を指摘している。なお、このような例の尊像と関連する弥勒図像として、松島氏は、『覚禅鈔』本をはじめ、類本として次の諸例を挙げているが、要するに、仁和寺本、九原文庫本、醍醐寺本、観智院本の各「弥勒菩薩画像集」等に掲載される「如来形弥勒像」を根拠に次のように述べている。

「(前略) 弥勒仏は、諸仏通用の施無畏与願印か左手を伏掌して膝においた触地印に造られ、持物の類は執らないのが普通であるが、胎蔵界大日如来の法界定印と同印をとる場合がある。結跏する両足の上に左手をおきそれに右手を重ねる印相であるが、弥勒仏の場合には法塔を手掌上に戴くのが通例である。(後略)」

確かに松島氏も指摘するように、肉髻・螺髪を表した定印弥勒如来は、例えば長崎鉢形嶺経塚出土の弥勒石仏（久安元 (1145) 年）のように、持物の宝塔を失えば、定印阿弥陀像と異なるところはない。この第一龕の丈六如来像の膝前は、手先も膝も磨滅し持物は不明である。尊名を決める確証はないものの、松島氏は「(前略) 第一龕は宇佐宮神宮寺弥勒寺の影響下に弥勒群像として造営されたもののように思えてならない。(中略) 両脇侍像の宝冠に観音・勢至菩薩のそれぞれの標識である化仏・水瓶が表示されないのもおそらくそれ故であろう。(後略)」と結論づけている。はたしてそうだろうか、はなはだ疑問が残る。実際には、標識の見られない、観音・勢至の作例も確認されるからである。ちなみに、仁和寺阿弥陀三尊（国宝）を例にとって考えて見よう。すなわち、阿弥陀の両脇侍像は、両像とも互いに内側の手を屈臂して蓮華を持ち、その逆の手を垂下するが、それぞれの宝冠もしくは、天冠にはそれぞれの特徴をなす標識は確認されない（図７）。しかし、記録の上では、『阿娑婆抄』や『白寶口抄』、さらに『覚禅抄』所載の恵什説などによれば、古来、阿弥陀三尊形式として伝来しており、諸先学もそれを支持している。実際にこの調査に従事された西川新次氏、あるいはその論究の見られる紺野敏文氏は、阿弥陀三尊説を是認されている[8]。

ところで、松島氏は「(前略) 尊名不詳の二体のうち左方像は屈げた左臂辺りに衣文の刻出が認められ、上帛、天衣を著けたいわゆる菩薩形でないことは確か。母岩に残る頭部の痕跡・輪郭からは、頭部は円頂のようにみえ、いわゆる僧形像である可能性が大きい。従って。随侍する主尊が阿弥陀如来ならば、地蔵・龍樹の二菩薩かと思えるが、弥勒仏とすれば、神通をもって兜率天に至り弥勒菩薩について大乗空観を受けた無著と弟の世親と見るべきであろう。(後略)」と言及している。しかし間髪を入れずに、次のように述べているのは全く不可解である。すなわち「(前記) 弥勒仏と九品阿弥陀の中尊の台座にもホキ第一群第一・二龕と同じく埋経のための孔があることも、第一・二群が一連の造営であることを示唆している。第一・二群が関連するものとすれば、前記した別材製の足先を残して影形もない一体の立像は地蔵菩薩である可能性が考えられる。(後略)」と、一旦は無著・世親像説を挙げ、すぐさま地蔵菩薩説を提示して両立させている。このような矛盾点はいくつか見られるが、明らかに論理的一貫性と厳密性に欠けているのは、次の部分でも確認できよう。つまり

「(前略) ホキ第一群第一龕（実は、第一龕ではなく、第二龕の中尊・阿弥陀の方がより妥当性が高い　＊仲嶺補訂）の現世阿弥陀とホキ第二群の未来仏弥勒の中間を占める像としては地蔵菩薩こそふさわしいといえる。(後略)」と確言している。はたしてこれは、どのように解釈すればよいのだろうか。要するに、地蔵の場合は、本尊阿弥陀に脇侍として付随する、いわゆる地蔵・龍樹の二菩薩の中の一体として位置づけられる。松島氏は、地蔵菩薩と明言したの

であるから、中尊は阿弥陀とするべきであり、さらにその脇侍関係からは、自然に地蔵・龍樹とするべきである。逆に、中尊が弥勒であるとするならば、両脇侍として付随する無著・世親像を配置するのが自然であり、それ以外に何を配置すべきであろうか。同氏は、自説の矛盾を率直に認めるべきである。

ちなみに、濱田隆氏は次のような興味深い事柄を挙げている。つまり、『覚禅抄』によると当初、延暦寺常行堂の本尊は、法・利・因・語の四菩薩をめぐらした阿弥陀五尊であったが、11世紀にはいると常行堂の本尊として前記の密教像を安置することは次第にすたれ、むしろ『山門堂舎記』等によれば、阿弥陀仏に観音、勢至、地蔵、龍樹をめぐらす構成の阿弥陀五尊像が広く用いられるようになったことを指摘している[9]。ともあれ、このような信仰の変遷の中で、ホキ石仏第二群第一龕の尊像配置を考えるべきであるが、したがって管見では、阿弥陀三尊像に地蔵、龍樹の二像を加えた五尊形式と推測している。ちなみに、五尊とも坐像ではあるが、その類例として、中村隆燈氏蔵阿弥陀五尊（中尊は定印、宝冠、図８）の鏡像と愛媛・保安寺（中尊は定印、螺髪、無冠）の彫刻を挙げることができる。

この他に松島氏の認識の誤りと思われる箇所を指摘すると次の部分が見られる。すなわち、「(前略）ホキ石仏第二群第一龕の丈六如来三尊に随侍する不動・毘沙門天でふれたように、（後略)」と述べているが、実はこの不動と毘沙門天は、正確には、次のホキ石仏第二群第二龕に付随するのである。近年修理を終えた不動は、前記の元の場所に設置されたので、明らかに松島氏の認識の誤りであると言えよう。

松島氏は「(前略）憶測するに、ホキ第一群の磨崖の（向かって　＊仲嶺補足）右端に位置する地蔵十王像は、ホキ第二群の地蔵立像が崩落して失われたため、それに代わるものとして、鎌倉時代に流布した宋の偽経『地蔵菩薩発心因縁十王経』等にもとづき追刻されたのではないか。(後略)」とのべているが、ここは細心の注意を要する。つまり、文章に即して厳密に考えれば、同氏は前記のホキ第二群第一龕の不明な二体の像については、地蔵と龍樹、そして主尊は阿弥陀であることを逆に証明していることになる。また、同氏は「(前略）金剛薩埵を本地身とする愛染明王を彫り表した理由は定かでない。」と述べているが、臼杵を支配した地方豪族・大神氏が、武士階級であった事実を勘案すれば自ずと首肯されよう。すなわち、一族の子孫繁栄を祈願することは武家にとっては、切実な問題であり必然性が十分に認められる。

②第二龕（図９）

この仏龕は、等身阿弥陀定印坐像の左右に各四体の来迎印の阿弥陀立像と一対の菩薩立像が表されている。すなわち、九品阿弥陀に観音・勢至菩薩を両脇侍とした群像構成である。松島氏は「(前略）九品仏は第一龕に比べてその作行きはかなり劣っており、製作の時期もやや下るようにも思えるが、この弥勒石像と同じ複合的思想をもとに、第一龕の丈六弥勒仏の造立のあと引き続いて開鑿されたものかと思える。(後略)」と言及している。ちなみに、来迎印阿弥

陀は、来世への往生を期待する迎講の本尊ないし臨終行儀の本尊として造立された例が多く知られる。なお、この仏龕に付随する天部像に配置上対応するように不動坐像が復元されたが、これは広く天台系統の配置にまま確認される例である。松島氏は、先述のように第一龕に対応させて考えていたが、第二龕に付随させるべきである。

3）山王石仏（図10）

この仏龕は、丈六如来像を中尊にその両脇に半丈六像の如来を各一体を安置している。ちなみに、山王山石仏について、松島氏は如来三尊とも「(前略) 損傷が甚だしく、修理ではかなりの手が加えられており制作年代を推定しうる保存状態ではなく、考察の対象から除外する。(後略)」と断っていながらも、実際に考察を行っているのは一体どうしてなのか甚だ理解に苦しむところである。同氏は、管見とは異なり中尊の様式について「未熟な素人の稚拙な彫法」の結果と見ている。また、両眼の上下の眼裂が刻出されていない点に関して「未完成の金銅仏のようである」と指摘する。しかし、管見ではこれは当初からあえて刻出せず、むしろ墨や顔料で描いていたものと推測している。なぜならば、実は一見、一光三尊形式の仏龕に見えるが、後壁に残るわずかな痕跡から、各尊とも別々に朱彩で描かれた挙身光背を負うことが確認されるからである。つまり、光背の形状と同様に、尊像の両瞼の線は刻出されず、むしろ描かれていたものと推測される。さらに、松島氏が、「(前略) 未熟な素人作であることに加えて全体に傷みが激しいこともあって、この像の厳密な様式的判断はきわめて難しい。言及しうることは、この中尊像の全体観に平安時代後期の藤原という時代の風趣が看取されること。したがって、他のホキ第一・二群像とそれほど隔たった時期の作ではないだろうということに過ぎない。(後略)」と言及しているが、もう少し冷静に考えて見よう。本人自身が、はっきりと様式判断がきわめて難しいと断りながら、平安後期の風趣を察知し、ホキ第一・二群像とそれほど隔たった時期の作ではないだろうという時代判定を行っていることは、自家撞着とはいえまいか。きわめて不可解である。

また「(前略) この三尊像が日吉社に関わるものとすれば、中尊はその本地仏である薬師如来として造立された可能性が高い。(後略)」と述べている。これについても既に管見では山王本地仏曼荼羅や天台系統寺院に目立って確認される、いわゆる如来三体を本尊とする三尊形式などとの関連を踏まえて考えた結果、たとえ中尊の持物として薬壷の存在は確認されなくとも、薬師である可能性が高いことについて具体的に示した。ちなみに中尊の尊名は、薬壷が見られないが、延暦寺根本中堂本尊と同様に薬壷を持たない古式の薬師如来として造られたものと推測している[10]。

ところで、肉髻部と地髪部の境目が不明瞭かあるいは共に扁平な作例が、天台系薬師像に多く見いだされることを改めてここでも指摘しておこう。このような傾向を顕著に持つ薬師像と

して、清水善三氏は、以下の作例を挙げている。すなわち、京都長源寺薬師立像（10世紀）、六波羅蜜寺薬師坐像（11世紀半ば、図11）、奈良南明寺薬師像（その左脇に釈迦、右脇に阿弥陀を三尊形式で安置、10世紀末～11世紀初）、滋賀清水寺薬師像（10世紀半ば）、滋賀蓮台寺薬師像（10世紀末～11世紀初）等などであるが、さらに興味深いことに、天台寺院では、いわゆる三体本尊は、過去・現在・未来の三千諸仏の仏名を唱えて年内の罪障を懺悔する仏名会の本尊として祀られることを指摘している[11]。したがって、山王山如来三尊（特に中尊）は、このような背景や特徴を持つ天台系薬師像の一例として位置づけることができよう。また、既に言及したように、中尊に薬師、その両脇に釈迦と阿弥陀の二尊を置く、いわゆる如来三尊形式は、まずは京都来迎院の作例にそのモデルを求めることが出来る。髻部と地髪部の境目が不明瞭かあるいは共に扁平な薬師像の場合と薬師・釈迦・阿弥陀の如来三尊形式の作例の場合の、いずれの場合においても、その特徴が確認されるのは、天台系統寺院においてである。この共通性や特徴については、きわめて注目すべきである。臼杵石仏造営において天台や山王との関わりが濃密であることは、再三指摘したが、比叡山根本中堂本尊が薬師であることと、山王石仏中尊が薬師であることは不可分なことといえよう。臼杵石仏群全体の中でも、最も高い位置でかつ最も奥まった神聖な場所として、いわゆる奥の院として立地しているのが山王石仏の仏龕である。したがって、管見ではこの場所こそ、臼杵石仏群において最初に開鑿された霊験あらたかな聖地であったと見る。そして、その霊験を湧出させ森厳なる様を化現させる中尊としては、御利益の厚い薬師如来こそが最適であったと。

ところで松島氏は「未熟な素人の稚拙な彫法」と評価されたが、はたしてそうでしょうか。管見はかなり違う。かつて濱田耕作氏は、山王三尊を古園石仏群に比べて技術的に劣るという理由から。遅れた時代に置く説には賛成できないと言及されたが、その慧眼を高く再評価すべきである[12]（図12）。

ちなみに、視点・視角・視距離などを考慮し精緻に観察すれば、一見容貌は荒く素朴に見えるが、穏やかで温雅な優れた作風が看取される。すなわち扁平な頭部、童顔でやや突き出た唇、堂々とした重量感を伴う体躯などに、一種の古様さ、あるいは密教像的特徴が窺える。わずかに確認される裳懸座に結跏趺坐する点も古式な伝統の温存であろう。作風が、仁和寺北院薬師檀像（円勢・長円作）と極めて近似する点は注目すべきことである（図３参照）[13]。

山王の中尊は、古園の中尊大日如来やホキ第二群第一龕の中尊と共ににに丈六像であるが、おそらく三者は、臼杵石仏群全体の仏龕配置や構成の上でも緊密に関連しているものと考えられる。ちなみに山王石仏中尊の顔の法量（例えば面長57㎝・面幅60㎝）は、三者では最大であり、文字どおり臼杵随一の尊像といえよう。したがって、この点からも山王石仏は決して看過できないきわめて重要な位置づけを持っている。松島氏は、ホキ第一・二群像とそれほど隔たった時期の作ではないだろう、という見解を示しているが、管見では、それらと近接することに異議はない。むしろ、やや先行する時期（11世紀末～12世紀前半）に置いても良いと考えている[14]。

4）古園石仏（図 13）

この仏龕は、金剛界大日如来の丈六坐像を中心に、左右に各六体等身像が並列する。その左方は内より如来二体、菩薩像、宝冠正面に化仏を表す菩薩像（観音菩薩）、上半身の一部を残す尊名不詳（仲嶺説：地蔵）、左掌に宝塔を捧げ持つ多聞天（毘沙門天）立像、その右方は同じく内から如来二体、菩薩像、宝冠正面に水瓶を表す菩薩像（勢至菩薩、ただし胎蔵界曼荼羅を考慮すれば、弥勒菩薩と見ることもできる）、不動明王像、天部立像を配している。

松島氏は古園石仏群の尊像構成について次のように見ている。すなわち

「（前略）印相の不明な尊が多いため、確かなことはいえないが、金剛界曼荼羅の成身会における中尊金剛界大日如来に四方四仏と四親近菩薩[15]を横並びに配し、これに守護神として不動明王（この不動は地蔵に対応させるべき：＊仲嶺）・毘沙門天の一対像を付し、さらにこの毘沙門天すなわち多聞天に四天王像一体（増長天のことか）を加えて二天の意味をもたせたとも推察される。しかし、四仏については釈迦、阿弥陀、薬師の正・像・末の三仏に未来仏の弥勒を加えて構成したものかと思え、四菩薩のうち尊名不明の二体は（仲嶺説は、右側は文殊菩薩：左側は普賢菩薩と推測）薬師の脇侍である日光・月光菩薩とみるべきかもしれない。（後略）」と。

以上松島氏は、成身会の中尊・金剛界大日如来を中心に据え、四方四仏、四親近菩薩、不動、多聞天をその周りに配置していると指摘するが、かつて筆者は、全体の構成意図を慈悲と智慧の二部に大別し、具体的な検討を行った。後掲の配置図は、その仮説に基づくもの[16]。すなわち、古園石仏の尊像配置について、成身会との関わりを指摘したが、その中心部は、中央に大日如来が君臨する。その大日に最も近い内側・左右二体ずつの如来形は、それぞれ図のように阿閦（東）、宝生（南）、阿弥陀（西）、不空成就（北）と考えている。また、この五智如来に隣接する外側の左右二体ずつの菩薩形は、それぞれ下図のように尊名を推測している。

なお、左脇群と右脇群は、それぞれ慈悲部と智慧部で構成され、対応する配置になっている。

（智慧部）						（智慧・慈悲）	（慈悲部）					
⑥	⑥	④	③	②	①	大	①	②	③	④	⑤	⑥
天部形立	不動坐像	勢至坐像	菩薩坐像	宝生坐像	阿閦坐像	日坐像	阿弥陀坐	不空成就坐像	菩薩坐像	観音坐像	菩薩形坐像	多聞天立像
△	★	☆	◎						◎	☆	★	△
増長	不動	金剛利	文殊						普賢	金剛法	地蔵	多聞

一方、十三体並ぶ尊像構成について、松島氏は次のように推測している。すなわち、「（前略）ホキ石仏第二群第一龕の丈六如来三尊に随侍する不動・毘沙門天（実は次の第二龕に不動と毘沙門天は付随する。松島氏の認識の誤り：＊仲嶺）でふれたように、古園石仏におけるこの二尊の存在もまた天台系統の影響を考えるべきであろうが、十三仏という数については、仁和寺本『弥勒菩薩画像集』等に所載の弥勒図像の背後に巡らされた十三の化仏とかすかに繋がりがあるかに思われる。定印弥勒仏が胎蔵界大日と同体とみる思想があることについてはすでに述べたが、ホキ石仏第二群の弥勒定印丈六像を同体である胎蔵界大日如来にみたて（阿弥陀の場合でも胎蔵界大日如来と同体説は成り立つ：＊仲嶺）、この一群に対応する群像として金剛界丈六大日如来像を中心とする十三仏の龕を開鑿造立したのではないか。（後略）」と。

確かに、十三仏の配置については、台密や東密の儀軌との関係において、具体的にその全貌の解明をしなければならないが、いまだ十分に対応関係や裏付けを示した訳ではない。松島説は、その解釈に当たっての一説として提示されたのである。つまり、前記のように弥勒像光背との関係において十三体の仏像の並ぶ例を挙げた訳だが、このような例は、必ずしも弥勒に特有のものとばかりは言えない。翻って考えて見ると、光背中に十三の化仏を付けた作例は、例えば三千院往生極楽院本尊の阿弥陀像（脇侍として観音・勢至の三尊形式）、安楽寿院阿弥陀像（定印。鳥羽上皇の遺骨を納めた三重塔本尊か。武笠朗氏は、保延五（1139）年説、円勢の長子・長円の工房作と見る[17]。）、近衛天皇陵（多宝塔安置）の阿弥陀像（来迎印。保元二（1156）年）等にも認められる。中でも三千院の作例の場合は、中尊阿弥陀の光背中に各尊像と対応する種字が並列されていて、あらためてその関連性の強いものと考えられ、きわめて注目すべき一例である（図14）。

古園の十三体の尊像構成の原理や尊名を特定することは、現状ではきわめて難しいが、佐和隆研氏が、信仰が盛大であれば、尊像制作に際して儀軌が無視される例があること指摘している点は看過できない[18]。ちなみに管見では、弥勒・大日如来同体説も考慮する必要はあるが、

同様に阿弥陀・大日同体説も十分に成り立つことを指摘しておく。

ところで古園大日像の様式を考えるに際して、頭部や面貌の表現は極めて重要な箇所である。松島氏は、以下のように指摘する。すなわち、

古園大日如来像は「(前略) 全体のプロポーションを正確に把握することは容易ではなく、年代の推定は頭部の造形と面貌表現に頼らざるを得ない。京都峰定寺の千手観音像（像高31.4cm：＊仲嶺）は小品であり、丈六の巨像である古園大日如来像との様式比較にはあまりふさわしい作とはいえないが、『大悲山峰定寺縁起』にいう仁平四（1154）年二月、観空西念が三間の堂を創建し本尊として安置した白檀二尺の千手観音にあたるものと大方に認められており、このころの数少ない基準作として両者の面貌表現の類似性が指摘されることが多い。その下膨れの丸い顔、切れ長でうねりのある両眼などは、古園石仏中尊大日如来像のそれと確かによく似ている。しかし、本像には全体に平安時代の末期的な繊細さが強く現れているが、古園大日像にはまだそうした傾向は見られず、様式の変遷からすればこの仁平四（1154）年をもって古園大日の造像の下限とみることができるだろう。(後略)」

まず、古園大日如来（図15）の頭部や面貌との近似性を持つ京都峰定寺の千手観音像（図16）から述べていこう。既に筆者は、峰定寺千手観音像との近似性として、天冠台からはみ出す髪際、瞑想的な伏し眼、気品ある口元、慈悲深い温容などを挙げたことがある[19]。松島氏は、小品で様式比較上、あまりふさわしくないと言及しているが、両者の面貌表現の類似性が指摘されることが多いことは本人も認めている。同氏は、小品であるから様式比較の対象にふさわしくないと言うが、たとえ小品であろうと腕前の良い作者（仏師）は、伸縮自在に同質性を維持し、その様式や伝統を墨守することが多い。その一例として、唐時代竜門石窟の諸仏龕中の仏像をじっくりと観察するとよい。大中小の諸仏龕において、法量の差は認められるものの、様式上は全く同質と見てよい作例が目立つ。そのような傾向をもつよい作例が峰定寺の千手観音像である。小品だからという理由は、様式判断に際しては、きわめて重大な決定的要素ではない。また、松島氏は「(前略) 平安時代の末期的な繊細さが強く現れているが、古園大日像にはまだそうした傾向は見られず、様式の変遷からすればこの仁平四（1154）年をもって古園大日の造像の下限とみることができるだろう。(後略)」と判断しているが、確かに古園大日如来像には、峰定寺千手観音像に見られる繊細さは少ない。一部に古様さを温存させながらも、むしろやや硬化し形式化した要素が認められる。さらに同氏は、仁平四（1154）年をもって古園大日の造像の下限と見ているようだが、拙著でも触れたように管見では１２世紀半ば頃の開鑿開始と見る。全体の完成と整備の問題を含めて考えれば、中尾五輪塔銘の嘉応二（1170）年、承安二（1172）年頃には、覆屋が造立されたものと見ることができる。

同氏は、この他に古園大日如来像との近似性の見られるが作例として、奈良西大寺四王堂（観音堂）本尊十一面観音立像[20]を挙げているが、「前略）この西大寺四王堂十一面観音（久安元1145年に仏師法橋円信が造立）のやや平板な面構成は、古園大日如来のより起伏のあるそれと酷似しているとはいえないが、先の峰定寺千手観音像をその間に介在させれば、三者は同

系統すなわち円派の系統をひく仏師の手になるものと見ていいのではなかろうか。(後略)」と言及している。

ちなみに後述のように松島氏は、大阪茨木市大門寺本尊如意輪観音像（図17）を最も近似する作例として挙げているが、まだしも、西大寺十一面観音立像の方が、面貌表現において、やや平板とはいえ少し下膨れの頬で、唇もやや横広ではあるが、比較的近いといえる。

ところで筆者は、既に古園石仏中尊・大日像と仏師康助作と比定される金剛峰寺大日如来（天養元 (1144) 年～久安四 (1148) 年。図18）との近似性について触れたことがある。すなわち、像容はもちろんのこと、裳懸座、五智如来の一具という点において共通性が確認される。しかしどちらかというと、円派仏師という松島説に対して、管見はむしろ奈良仏師との関係の方を重く見ている。ちなみに武笠朗氏は、康助の本分は定朝様の継承とその刷新にあると想定されたが、金剛峰寺大日如来像は、それに合致するものであった。管見では、古園大日如来像は、この金剛峰寺大日如来像に近似するものと見る。ちなみに、康助は、永久四（1116）年奈良中川成身院本尊の大日如来像をも造立したことが指摘されている[21]。実はその成身院に東密・台密の総合化を図った覚鑁とも緊密であった実範が止住したことが知られる。すなわち、櫛田良洪氏によれば、実範と覚鑁はほぼ同時代の人で、年齢も大差なく、密教に精通、相互に交渉、かつ師資となり事教二相を究めたという。さらに臼杵石仏と関連する注目すべき事実として、成身院に大治四（1129）年鋳造銘かつ長寛二（1164）年再鋳銘の梵鐘が存在することが知られる。つまり、その鐘身に陽鋳された五輪塔が確認されるが、そもそも五輪塔信仰が、覚鑁に始まることを重視するならば、臼杵中尾の古式の五輪塔との間にはきわめて重大な相即性が認められることになる。覚鑁は、密教を主とするが、浄土教を真言密教の中に融合させ、密教と専修念仏の一致を説き、密厳浄土即極楽浄土、大日即阿弥陀と考えた[22]。事実、臼杵五輪塔銘には密教との濃密な関係を示す「阿闍梨」の名が明記されている。

さて、前記の実範及びその止住した中川成身院は、天台と真言と浄土の兼学で有名であるが、摂関家の藤原忠実とも密接であり、忠実本人および北御方の出家に際して、実範が戒師を勤めている[23]。さらに、忠実の子・頼長も実範とは親密であり、実範の示寂について『台記』は天養元年九月十日と明記している[24]。拙論では、摂関家の忠実、忠通等と臼杵との関わりについて詳論したが、彼らが接触した僧侶や仏師や貴顕の人間たちとの深い縁が、また臼杵石仏の上にも連動しているものと考えられる。ちなみに、実範が奉仕した範俊は、世に鳥羽僧上と呼ばれ、鳥羽法皇の護持僧として有名であるが、奈良仏師・康助の鳥羽御堂における造仏は、忠実の仲介によるものである[25]。

以上、様式の比較や仏師系統、あるいは信仰上の問題等について検討してきたが、松島氏は「(前略) いずれにせよ、丈六という大作をいわゆる定朝様に則りながら過不足なくまとめ上げた手腕からすれば、すくなくとも都の仏所に属しながらかなりの造仏の経験を踏んだ仏師のように思える。(後略)」と述べている。

要するに、臼杵石仏造営に関して、「都の仏所で熟練した技を磨いた仏師」が関与したもの

と考えている訳である。

ところで、さらに円派仏師との関連から松島氏は、鳥取大山寺常行堂本尊阿弥陀及両脇侍（天承元 (1131) 年、大仏師大法師良円銘）を挙げ、次のように言及している。すなわち、

「（前略）三尊像は三度の修理を経て、表面には厚い金箔が押され、特に顔面は眉や瞳が墨書きされて著しく尊様を損ねているが、両脇侍像の面幅が広く丸い顔立ち、頬から顎につらなる曲面は古園大日のそれに近いものがあり、同時代的な類似性として注目される。また、中尊の裳懸座に対する両脇侍を蓮華座とする組み合わせが、ホキ石仏第二群の丈六阿弥陀三尊像の台座と共通することも見逃せない。（後略）」

早速、上記の同時代的な類似性と言及している点を確認しよう。つまり、「同時代性」とは、天承元（1131）年造像銘から判断して、12世紀前半から半ば頃ということになる。後述のように12世紀より以前に遡るものではなく、その前半と判断している。しかし、この説は、かつて西川杏太郎氏が提示された平安後期（11世紀）説とは相違する結果となる[26]。

さらに「（前略）中尊の裳懸座に対する両脇侍を蓮華座とする組み合わせが、ホキ石仏第二群の丈六阿弥陀三尊像の台座と共通することも見逃せない。（後略）」と言及しているが、文中の「ホキ石仏第二群の丈六阿弥陀」の表記は、正確には、「ホキ石仏第二群第一龕丈六阿弥陀」と補足するべきである。しかし、松島氏は、前記で既にこの本尊名を「弥勒如来」と言明していたので、明らかに矛盾している。さらに文意からは、このホキ石仏第二群第一龕本尊の台座が、かつて拙論で指摘したように裳懸座であることを認めていることにもなる。

この他に、古園大日如来像の面貌にもっとも近似する像として、大阪茨木市大門寺本尊如意輪観音像（久安六 (1150) 年～久寿二 (1155) 年）を挙げているが、管見では最も近似する作例とは見られない。先述の松島氏の論法に従い冷静に判断すれば、京都峰定寺の千手観音像（像高31.4㎝）は小品であるので、丈六の古園大日如来像（像高286.4㎝）との様式比較にはあまりふさわしい作とはいえない。もしこの立場を維持し、論理の一貫性を示すならば、明らかに大門寺本尊如意輪観音像（像高58.8㎝）も、同様の小品であり採用すべき作例とはいえない。しかし、松島氏は両者の法量に大差が見られる点に留意せずに、比較の対象として選んでいる。逆に言うならば、様式比較にふさわしいからこそ採用したはずであり、明白な矛盾を露呈している。ちなみに、細見すれば両者の面貌表現において、特に上瞼のカーブや内外の眦の線の仕上げ方などがかなり相違している（図15参照）。この他に鼻や唇や耳介、天冠台からはみ出す髪際などの表現もそれぞれ違っている。むしろ、全体的には峰定寺千手観音像の面貌表現との近似性が高い（図16参照）。様式比較する際の管見において、作品が充実度や品格を維持していると認められる場合は、作品の法量の大小の差に関わらず、積極的に採用することにしている。したがって、古園大日如来の面貌表現と最も近似する作例は、まずは峰定寺千手観音像であろう。しかし、松島氏は大門寺如意輪観音像との比較から次のように述べている。すなわち

「（前略）頬や顎にかけては大日がふっくらとしており、体部の造形特に肩から胸にかけての上半身の肉付けもより豊かであり、腕も太い。これらの要素は大日如来像がやや先行して造られ

たことを物語っているとみていいが、12世紀より以前に遡るものではなく、その前半と考えるのが穏当なところであろう。作者はやはり中央から招かれた一流の仏師、正系ではないが円派の系譜を継ぐ有力な仏師と考えていいだろう。(後略)」と結んでいる。確認のため繰り返すが、同氏は、古園大日像の造営年代について、12世紀前半と判断している。年代は、かつて提示した管見とほぼ一致する。しかし、作者は「中央から招かれた一流の仏師、正系ではないが円派の系譜を継ぐ有力な仏師」と推測しているが、これに関しては甚だ異論がある。円派仏師と判断するには、前記の作例だけでは不十分であり無理がある。だだし、松島氏は傍証資料として石塔銘を挙げて補説している。すなわち

「(前略) 満月寺の境内東側に石造の五重塔がある。そのの塔身部には正和四 (1315) 年 (大分市円寿寺五輪塔に正和五 (1316) 年銘あり、逸亡：仲嶺) があり、臼杵の平安期石仏とは何らの関わりを持たないといっていいが、そこに作者 (阿闍梨) として刻される「円秀」の名が気にかかる。単に円の一字からの憶測にすぎないが、この円秀は都から下向した円派仏師の系譜に連なる者かあるいは彼らに従って造立に従事した在地仏師の末裔かではないかと思え、円派仏師が臼杵石仏の造立に関わった歴史的事実をかすかに伝えているように思えなくもない。(後略)」確かに、前記の石塔には、金剛界四仏の種字とともに、阿闍梨・隆尊が先師尊全および亡父母のために、阿闍梨・円秀に造立させたことが刻まれている。阿闍梨・隆尊や円秀らが、石仏造営に直接関わった訳ではないが、臼杵石仏群全体の造営に関わる問題を考える際には、このような傍証資料に十分留意する必要がある。実際、堅実に天台と浄土と密教の歴史的展開をふまえて、臼杵石仏の諸問題について考察せざるを得ない。

二　造営の背後について

さて、臼杵石仏の造営に背景には、台密・東密の両教、神仏習合、摂関家、天皇・院政、国司、地方豪族大神氏などの諸問題があることはすでに触れた[27]。

松島氏は、従来から指摘されている天台宗の影響を挙げているが、具体的には近年提示された飯沼賢司氏の説に同調して言及している。すなわち「(前略) 永保元 (1081) 年の宇佐宮弥勒寺における白河天皇御願による新宝塔院建立を契機とする九州地域における経塚造立などの天台僧の広汎な活動と対応して造営されたものとみていいだろう。(中略)。臼杵の石仏もまたこの末法に対応するものとして発願されたことは、ホキ第一群の中心である第二龕の主尊が末法の教主たる阿弥陀如来であり、しかもこの尊の造立のために優れた円派仏師を都から招いていることからも容易に察せられる。(後略)」確かに、仏像の造営に関しては前半の「宇佐宮弥勒寺における白河天皇御願による新宝塔院建立を契機とする九州地域における経塚造立などの天台僧の広汎な活動と対応して造営されたものとみていいだろう」という点は支持できよう。しかし、後半の「優れた円派仏師を都から招いている」という箇所は、決定的証拠も事実もな

く、あくまで推測が可能であるという範囲にとどめるべきである。すでに筆者は山王石仏に関して、天台系の如来三尊形式や薬師像の特徴、あるいは山王本地仏曼荼羅等との比較を踏まえて、その尊像構成や尊名の特定を行ったが、とりわけ中尊の特徴から、円派仏師の関与の可能性が高いことを指摘した。詳しくは拙論に譲りたい[28]。

なお松島氏は「(前略) 山王石仏の丈六薬師一尊はその素朴な彫りからみても、作者は天台の修験者ではないかと思える。(後略)」と言及しているが、管見では、山王中尊像の容貌に近似する作例の一つと考えている仁和寺北院薬師檀像（康和五 (1103) 年円勢・長円作）を根拠に、円派仏師の円勢系統を想定したことがある[29]。ちなみに、彼は平安後期に最も活躍するが、延暦寺の僧（『重隆記』によれば、永久元 (1113) 年、興福寺末の清水寺別当に補任）にして、一時代前の定朝に匹敵する最高の仏師であり、また白河院側近としても有名であった[30]。山王石仏の作者について松島氏は「修験者」を想定しているが、管見では台密に関わる「勧進聖」や「修験者」が、おそらく神秘的な岩場に霊験を感得して、つまり森厳なる神が仏に化現して湧出する様を思い描きながら、初めて開鑿を行ったものと想像される。換言すれば、神通力や霊験力に盈ちた僧侶であったからこそ、最も奇瑞・神秘性の濃厚な一番高い位置でしかも奥まった場所を選んだものと推測される。まさしく臼杵磨崖仏における奥の院の発祥地にふさわしい。

ちなみに松島氏は、宇佐神宮及び弥勒寺の影響も視野に入れているようだが、これは当時情勢から判断すれば、当然のことである。可能性として次のように言及している。すなわち

「(前略) 石仏造営にさいしては、この地方において当時なお隠然たる力を有していた宇佐宮やその神宮寺である弥勒寺の存在もまた無視できないように思える。ホキ第二群の丈六弥勒仏開鑿に宇佐弥勒寺との関わりが想定されることは前にもふれた。弥勒寺はその規模から推して、仏像の新造・修理にも応じていたかと思える。ホキ第二群の弥勒三尊仏はこうした弥勒寺に所属する仏師の中でも主だった者によって造立されたように思えてならない。ホキ石仏第二龕中尊（正しくは、ホキ石仏第一群第二龕中尊）や古園大日如来像に比べ、その面貌や量感表現にやや古様な趣があるのも、充分な造像経歴のある年配の仏師の保守的な作風が反映しているためと解することはできないか。(中略)。このように九州全域に膨大な所領をもつ宇佐宮も、１２世紀半には藤原忠実の子女の高陽院領となっていたことが、「近衛家所領目録」によって知られる。宇佐宮が摂関領となった時期やその経緯については詳らかでないが、忠実が保安元 (1120) 年十一月十二日に内覧、関白停止、以後十二年にわたる籠居の身となる以前のことと考えられる。皇后泰子が高陽院を号したのは、保延五 (1139) 年七月のことで、同七年五月五日に尼となり、天養年 (1144-1145) には宇佐宮に祈皇寺を建立、久寿二 (1155) 年に薨去している。宇佐宮・弥勒寺が臼杵石仏造営に関わっていたとすれば、その本家である高陽院や藤原摂関家これに結縁した可能性も充分にありえるだろう。(後略)」

確かにホキ第二群第一龕の丈六仏の造営の背景には、宇佐弥勒寺との関わりが全くない訳ではないが、関連を示す具体的で十分な証拠はない。同様に「充分な造像経歴のある年配の仏師の保守的な作風が反映」されていると指摘しているが、その根拠となる基準作例を具体的に挙

げて説明している訳でもない。あくまで可能性や蓋然性の一つであることを断って置くが、松島氏とは想定する作者が異なるものの、院覚系統の院派仏師を当てはめ推論した拙論において、すでに言及したことがある[31]。

同様に以下の問題点に関しても、上記の拙論において言及したが、当時の政治と宗教の展開、あるいは荘園支配をめぐる諸問題と関連づけて考える必要がある。とりわけ、摂関家や天皇（院政）との関係、あるいは、国司と地方豪族との問題、あるいは、荘園経営とその相続・維持の問題等を考慮しなければならない。具体的には、摂関家の忠実、忠通（室・宗子）を経て兼実に至る時代の宗教と政治の関係をダイナッミックに捉える必要がある。

さらに、以下に松島氏の言及を紹介しよう。すなわち、

「(前略) 豊後国臼杵・戸次荘の立券の時期もおよそ十二世紀初め頃といわれる。久安四（1148）年京都法性寺の境内に摂関家藤原忠実の室宗子が建立した最勝金剛院領となり、宗子から子女の皇嘉門院聖子に譲られた。この頃臼杵地方を実質的に支配していたのは、平安時代十一世紀後半から十二世紀初め頃にかけて、国衙の在庁官人や郡司・郷司などの公職につき豊後国の各地に勢力を扶植していた豊後大神一族から出て臼杵に割拠した臼杵氏であったと考えられている。臼杵石仏の造営の支援者についてはこの臼杵氏とする説が有力である。石仏の開鑿が始められた十二世紀の前半期に、臼杵の地が臼杵氏の支配下にあったことが事実とすらば、これほどの大事業に開発領主である臼杵氏が全く関与しなかったということはあり得ないことで、十二世紀前期から中期に生まれ臼杵氏から分かれて緒方氏を称したことが確実な史料から知られる惟栄の兄の惟隆をその支援者と見る説もある。しかし、石仏造営開始の時期からは惟隆というよりむしろその父である惟茂の代と考えるべきではないだろうか。臼杵荘の立券もこの惟茂の時代と考えられており、臼杵の地の差配を任された荘官臼杵氏が、石仏造営に際しても自らの権力の誇示と中央の権門との密な繋がりを求めて都の一流の仏師の招請を企て、荘園の名目上の領主である藤原氏に都のしかるべき仏師の派遣を要請することは充分有り得べきことのように思える。(後略)」上記の事柄は、従来先学によって指摘されたことであるが、筆者もその驥尾に付して拙論を展開したことがある。すなわち、その中で「都の一流の仏師」としての円派・院派の仏師、あるいは奈良仏師の関与の可能性について言及した。特に『仏教芸術229号』においては、ホキ第二群第一龕の丈六仏（阿弥陀三尊）の造営に関して、院派仏師の関与という拙論を展開した。ちなみに、臼杵石仏造営の同時代的背景を考える上で参考になるものと推察されるので、以下に武笠氏の論文を参考に、鳥羽御堂造仏に従事した仏師と尊名を掲げておこう[32]。鳥羽御堂という共通の場所において、協力して造仏に従事した一例であるが、臼杵石仏の場合も、このような共同作業を伴う仏師間の協力・合力の存在は考えられるであろう。

堂名	供養年次	安置仏	仏師名
証金剛院	康和三（1101）年	丈六阿弥陀	円勢
勝光明院	保延二（1361）年	丈六阿弥陀等	賢円

安楽寿院阿弥陀堂	久安三（1147）年	丈六釈迦三尊等	長円・円信
金剛心院阿弥陀堂	仁平四（1154）年	丈六九体阿弥陀等	賢円・院尊
安楽寿院不動堂	久寿二（1155）年	半丈六不動三尊	康助（奈良仏師）

以上が、鳥羽御堂造仏関連の事柄である。ここでは、平安後期の主導的仏師であり、政治的人間でもあった円勢、その弟子の長円と賢円、長円の弟子の円信、あるいは、定朝様の継承と革新に努めた院派仏師の院覚、その弟子の院尊、あるいは、奈良仏師（興福寺仏師）の正系棟梁である康助等の活躍が見られる。いわゆる鳥羽離宮の存在する場所は、賀茂川と桂川とに挟まれた水利の便の勝れた所である。京都とその周辺を結ぶ当時の水上交通の要にある。この水利の便の発達が、畿内、あるいは瀬戸内、あるいは九州へと、その政治・経済・宗教上の諸勢力の範囲を拡大させていったと見ることができる。天台勢力の九州への伸張はその一例であり、一方、石清水八幡と宇佐八幡はその往来の振幅を示す両極の役割を担っていたと考えられる。ともあれ、我々は、臼杵石仏全体はどのような歴史的展開の中で見ることができようか。

以下に引用が長くなるが、松島氏の見解を示しておこう。すなわち

「（前略）臼杵石仏のみならずこのような大規模な造営が縷々ある重大な事象や記念的な時日を契機に企てられることを思えば、その開鑿は例えば末法に入ってから五十年あるいは百年を画期として始められたのではないかと思える。前者ならば1101年、後者ならば1151年ということになる。着工までに相当長い準備期間を要したと考えられることから、前者を機に造営発願のことがあり、末法八十年あたり（1131年頃：＊仲嶺補足）に円派仏師の一流を招いてホキ第一群の阿弥陀如来（第二龕の中尊のことか：＊仲嶺補足）と古園大日如来像を造立、これと平行しつつ地元の仏師達がホキ第二群の弥勒仏にかかり、天台修験者らによって山王薬師仏の開鑿も始められたのではないか。この石仏造営とあわせて埋経のための千部写経の大事業も進められたのであろう。主たる石仏の造営は彫り易い軟質であるが故に、一カ年は経ずして工を終えたものと考えられる。しかし写経のことは大門寺一切経と同様に長期にわたり、承安二（1172）年に到ってようやく結実、その記念として五輪塔を建立したのであろう。この間に都で起こった保元・平治の乱に伴う領主藤原氏の勢力の後退、藤原頼長方についた大神氏の嫡流阿南大神氏の没落と臼杵大神氏の台頭もまた写経事業を大幅に遅延させた要因の一つであったかもしれない。

古園石仏と相対する位置にある天台宗満月寺は、昭和51年から同57年の発掘調査の際に出土した瓦が宇佐弥勒寺の建久三（1192）年九年回禄後の瓦と同じ型式であることから、その創建は鎌倉時代初め頃と考えられている。ホキ第一群の大日如来（智拳印の金蔵界大日如来なので、あとの記述は完全な誤認：＊仲嶺補足）を主尊とする龕はこの満月寺の建立に際し全体を整備する中で、開鑿されたもののように思われる。おそらく胎蔵界大日如来（正確には、智拳印の金剛界大日如来：＊仲嶺補足）として古園の金剛界大日如来に対応すべく造立されたのであろう。その隣の地蔵十王の一龕はさらに遅れて鎌倉時代後期の造立と推定される。満月寺境

内の石造五重塔銘に残された正和四（1315）年はその造立の時期を暗に示しているのではないか。（後略）」

前記のように松島氏は「円派仏師の一流を招いてホキ第一群の阿弥陀如来と古園大日如来像を造立、これと平行しつつ地元の仏師達がホキ第二群の弥勒仏にかかり、天台修験者らによって山王薬師仏の開鑿も始められたのではないか」と言及するが、特になぜホキ第二群の丈六如来像が「地元の仏師」の造営なのか甚だ理解に苦しむ。管見では、これこそ院覚系統の優れた容貌を示す一例であり、強い推論ではあるが、まさしく都の一流仏師の作風と考えている。また、同様にホキ第一群の大日如来（金剛界・智拳印）が、厳然たる智拳印を示しているのに、なぜ胎蔵界大日如来として古園の金剛界大日如来に対応すべく造立されたのであろうか。論より証拠、ホキ第一群大日は、金剛界大日。松島氏は何を見誤ったのか、明白な誤解であり、よってその推察も誤謬である。

三　おわりに

以上、ここまでその都度、松島氏の論文に即して批判的に指摘しながら言及を重ねてきたが、要点をいくつかまとめてみよう。つまり、松島の論文は、文章がきわめて不明な箇所も散見されるが、（括弧の中に）意を補って読みつつ批判的に考えれば、以下のような見解をもってまとめることができよう。

まず、松島氏は、この『国華』論文に先行して発表された拙論に言及していないが、これははなはだ不審なことである。さらに一層不可解な点は、吉川弘文館刊行『臼杵石仏』に掲載された拙論に一切触れていないこと。同氏は、『臼杵石仏』掲載の飯沼論文に言及できた訳であるから、同書に眼を触れる機会が皆無であった訳ではあるまい。その意味では、松島氏の見解は、客観性や厳密さに欠けているといわざるを得ない。半歩譲って考えよう。たとえ、拙論に言及せずとも、臼杵磨崖仏以外にも無数の仏像と関わった同氏の豊富な研究調査の経験や学識に照らし合わせれば、誰よりも臼杵磨崖仏に対しては熟知しているべきである。事実、同氏の他の研究には、優れた論文・著作が多く、教示されること度々でもある。が、しかし、残念ながら、『国華』論文は、その優れた論攷とは著しく異なり、むしろ希有な例外として扱うしかない。要するに、厳密性や客観性を欠いている。同氏の論文は、文章の乱れが目立っており、論理の一貫性を守っていない。したがって、今後松島氏の臼杵磨崖仏に関する『国華』論文を査読する際には、重々細心の注意と判断力が必要になることを指摘しておきたい。

1 松島健「臼杵磨崖仏の成立試論」(『国華1215号　特輯　日本の石仏』朝日新聞社　平成9年)

2 仲嶺真信「臼杵石仏群」(賀川光夫編『臼杵石仏』吉川弘文館　平成7年)

3 仲嶺真信「臼杵ホキ石仏第二群第一龕仏の成立年代について」(『仏教芸術229号』毎日新聞社　平成8年)

4 賀川光夫編、前掲書、62-63頁。

5 清水真澄「東国における院派仏師の動向」(『中世彫刻史の研究』有隣堂　昭和63年)

6 賀川編、前掲書、62頁。

7 前掲『仏教芸術229号』、賀川編、前掲書、29-31頁。

8 紺野敏文「仁和寺阿弥陀三尊の造立年代の検討」(『仏教芸術122号』毎日新聞社　昭和54年)。他に伊東史朗「仁和寺阿弥陀三尊の諸問題と同寺二天像」(『MUSEUM NO.455』ミュージアム出版　平成元年)を参照。なお、監修・総本山仁和寺／京都国立博物館『仁和寺大観』(法蔵館　平成2年)によれば、この三尊のような特徴を持つ両脇侍像は、中国では皆無ではないが、日本ではきわめて特殊であるとする説がある。しかし、平成3年、佐賀県大和町築山瓦経塚出土の板瓦面には、菩薩宝冠に標識はないが、阿弥陀三尊と見られる例が確認され報告されている。よって、標識の示されない阿弥陀三尊の作例もあることを認識する必要がある。なお、この例では、同伴出土した他の板瓦面には天養元(1144)年銘と書写・供養者が記され、さらに、法華経、無量義経、阿弥陀経、般若心経、感無量寿経等を書写した瓦経以外に胎蔵界大日如来や釈迦像を描いた板瓦が埋納されていたことが判明した。松本隆昌「重要文化財　肥前築山瓦経塚の研究報告」(『仏教芸術244号』毎日新聞　平成11年)。

9 濱田隆「定印阿弥陀像成立史考(上)」(『仏教芸術100号』毎日新聞社　昭和56年)

10 仲嶺真信「臼杵石仏群の造立年代とその背景について」(『史学論叢第25号』別府大学史学研究会　平成7年)

11 清水善三「長源寺薬師像」(『仏教芸術101号』毎日新聞社　昭和50年)

12 賀川編、前掲書、48頁。

13 伊東史朗「仁和寺北院薬師坐像について」(『仏教芸術177号』毎日新聞社　昭和63年)

14 賀川編、前掲書、47頁。

15 明確に「四親近菩薩」と指摘したのは、拙論が最初である

16 賀川編、前掲書、50-56頁。

17 武笠朗「安楽寿院阿弥陀如来像について」(『仏教芸術167号』毎日新聞社　昭和61年)

18 佐和隆研『日本の仏教美術』143頁(三麗社　昭和56年)

19 賀川編、前掲書、61頁。

20 この十一面観音は、久安元(1145)年、円信が造立した京都白河二条の鳥羽院御願十一面堂の旧本尊であり、正応二(1289)年に西大寺に移安されたと見る説がある。武笠

朗「西大寺四王堂十一面観音像について」(『美術史　120』美術史学会　昭和81年)。なお、円信は、保延三（1137）年供養の鳥羽上皇御願の安楽寿院の造仏に従事し、勧賞として阿闍梨に補されているが、この「阿闍梨」の名称が臼杵中尾五輪塔と満月寺石塔の銘にも確認されるので、今後、阿闍梨が造塔、造仏等に関与した類例に十分留意する必要がある。

21　水野敬三郎「仏師康助資料」(『日本彫刻史研究』中央公論美術出版　平成８年)

22　櫛田良洪『覚鑁の研究』168、176頁（吉川弘文館　平成４年）

23　櫛田、前掲書、134頁。

24　櫛田、前掲書、150-151頁。

25　櫛田、前掲書、122頁、武笠前掲論文『仏教芸術167号』。

26　賀川編、前掲書、57頁、仲嶺前掲論文『史学論叢第25号』

27　仲嶺真信「臼杵石仏群の意義」(『アジア歴史文化研究所報第11号』別府大学アジア歴史文化研究所　平成５年)、仲嶺前掲論文『仏教芸術229号』

28　仲嶺前掲論文『史学論叢第25号』。

29　注28に同じ。

30　本木泰雄『藤原忠実』67-68頁（吉川弘文館　平成12年)、田中嗣人『日本古代仏師の研究』277-289頁（吉川弘文館　昭和58年）

31　仲嶺前掲論文『仏教芸術229号』。

32　武笠前掲論文『仏教芸術167号』。

図版出典

1、2・4・5・6・9・10・12・13・15・16	仲嶺撮影
3・16・17	京都国立博物館編『院政期の仏像』岩波書店　平成４年
7・8	奈良国立博物館編『阿弥陀仏彫像』東京美術　昭和50年
11	『古寺巡礼　京都25　六波羅蜜寺』淡交社　昭和53年
14	『古寺巡礼　京都17　三千院』淡交社　昭和52年
18	『密教美術大観　第二巻』便利堂　昭和59年

Critical study on Mr.Matushima Ken`s paper (A study of the Origins of the Usuki Magaibutsu) carried by the fine-arts magazine "KOKKA (國華) No.1215"

By Nakamine, Masanobu

The Usuki stone statue of the Buddha (Usuki-sekibutsu) was designated as Japanese national treasure in 1995. It exists in Usuki-shi, Oita, and the ruins are roughly divided into four groups. About 60 statues in all exist in the groups.

Compared with the other Japanese stone statues of the Buddha, Usuki-Sekibutsu is extremely excellent on the scale and the style. And that it was sculptured on the cliff of natural rocks is worthy of special mention. The Usuki-Sekibutsu is directly engraved on the cliff of Tuff by the volcanic ashes of Mt.Aso, and expresses the figure of the Buddha.

This is the form of so-called Magaibutsu. Needless to say, cave temple came into existence in India and developed remarkably in China. By examining the origin systematically, we can find the influence of India and China on the Usuki-Sekibutsu too. For example, in the fact that it inherits so-called Mokake-Za; the form in which the skirt point of the dress of the Buddha hangs under a plinth, we can find one of the remarkable characters of stone cave. A systematic investigation on Usuki-Sekibutsu had already been issued in Taisho period and the research was done by Dr.Hamada Kousaku in Kyoto University. The research is still utilized and its outstanding achievements serve as quite important materials.

Among the research results, which have been issued since then, many were done by Buddhism scholars, archeologists, fine-arts historians, artists, historians, etc. In recent years, the authorities concerned in the Agency for Cultural Property, Oita Prefecture, and Usuki-shi cooperated to do close restoration to the portions damaged in the past. Of course, in order to preserve the whole ruins of Buddhism and its environment for a long time, detailed and special measures were implemented.

Therefore, compared with the researches done before it, the present situation of research is remarkably improved. The research result by Mr.Matsushima Ken in the Agency for Cultural Affairs was released in 1997. Mr.Matsushima, however, develops his theory without mentioning the re search result I had released before.

Besides, I think his research leaves several points to be discussed. As this paper is sure to deal with a very important issue, we ought to examine Mr. Matsushima's

opinion carefully. As a result of it, I found out several problems which we cannot call only clerical errors in his editorial. Since I have studied Usuki-Sekibutsu in recent years, I cannot ignore these errors. So I have decided to criticize his editorial in this paper. Although we cannot find any logical consistency in Mr.Matsushima's paper, several ambiguous points in sentences can be found out as I have mentioned. In his tentative assumption on Usuki-Sekibutsu, he comments that it is quite possible that the sculpture of the second group of Usuki-sekibutsu is Maitreya. I do not agree with him about the name ofthe statue. I surmise that the name is Amitābha. At any rate, an objective consideration makes us know that each does not have conclusive evidence.

Rather, both suggest the probability and possibility as a hypothesis. The problems of Mr.Matsushima's opinion could be summarized as follows. First, the most mysterious is the comment of the Sannō-Sekibutsu. He observes that the Sannō-Sekibutsu is Triad of a Buddhist deity and two attendants. The center of the form is Bhaiṣajyaguru which is based upon Tendai-Buddhism. However, I already proved this matter before he pointed it. Moreover, concerning the Sannō-Sekibutsu, he comments that it is quite difficult to judge its style clearly. In spite of his consideration like this, he later comments the Sannō-Sekibutsu has a special feature of the second half of the Heian-Era, and that the age in which the statue was made may not be so much apart form the age of stone statues of the Buddha in the Hoki first group and the second group. Generally considering, the dificulty of judging the style may not be allow us to judge the time.

It is obvious that his view is logically contradictory.Strictly speaking, Mr.Matsushima has asserts that the Sannō-Sekibutsu is worth of style judgment.

Nevertheless, he estimates the way of carving amateur and childish. I have an objection against his estimates. For example, try to gaze at the statue with various conditions of light, light sources, view points, visual angles, etc, and we can gradually notice that the statue which appeared rough and simple at the first look has a remarkably quiet and mild style. In fact, Dr.Hamada commented he could not approve of the opinion that the Sanno-Sekibutsu should be low estimated becauee of the lack of the technique we could find in Furuzono-Sekibutsu. I think that we should approve and respect Dr.Hamada's keen insight. I cannot agree with Mr.Matsuhima about the other points. I concretely mentioned many issues of Usuki-Sekibutsu in my papers, work, etc. I want you to read and refer to them as to the detailed contents.

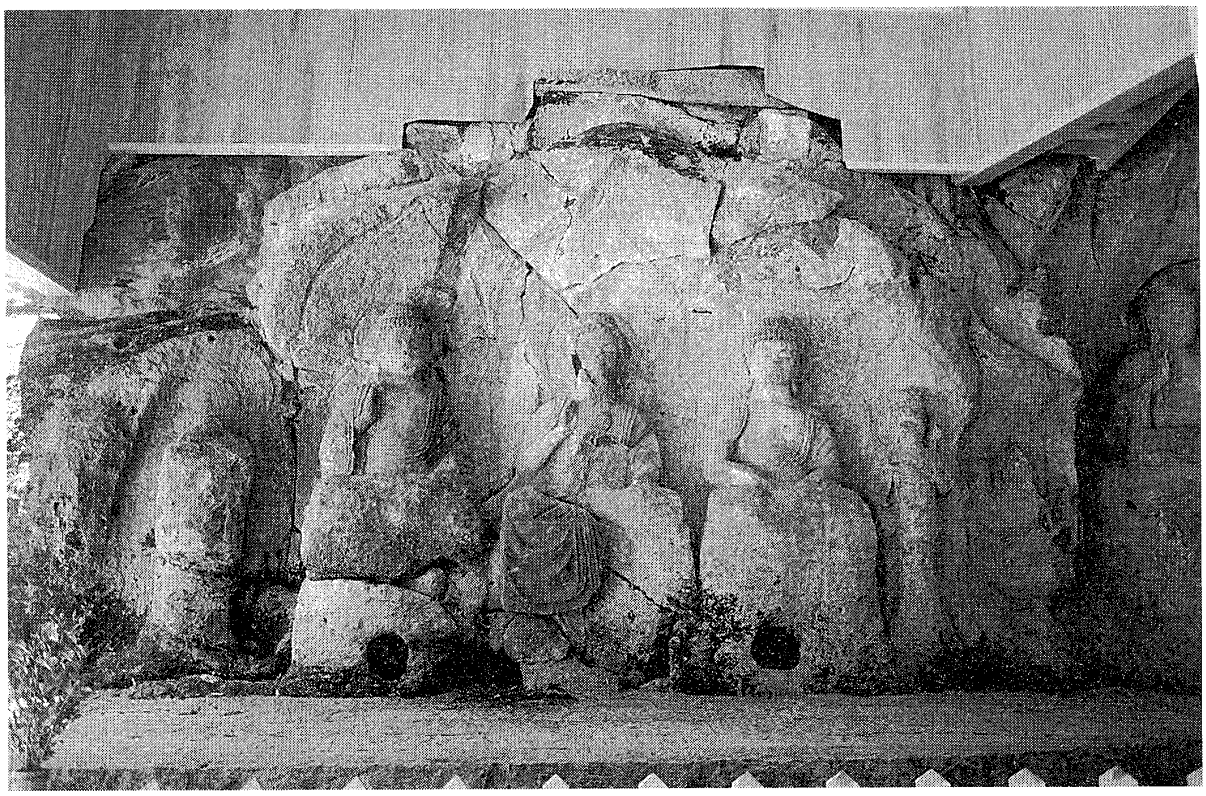

図１　ホキ第１群第１龕

図２　ホキ第１群第２龕

図３　仁和寺旧北院本尊薬師坐像

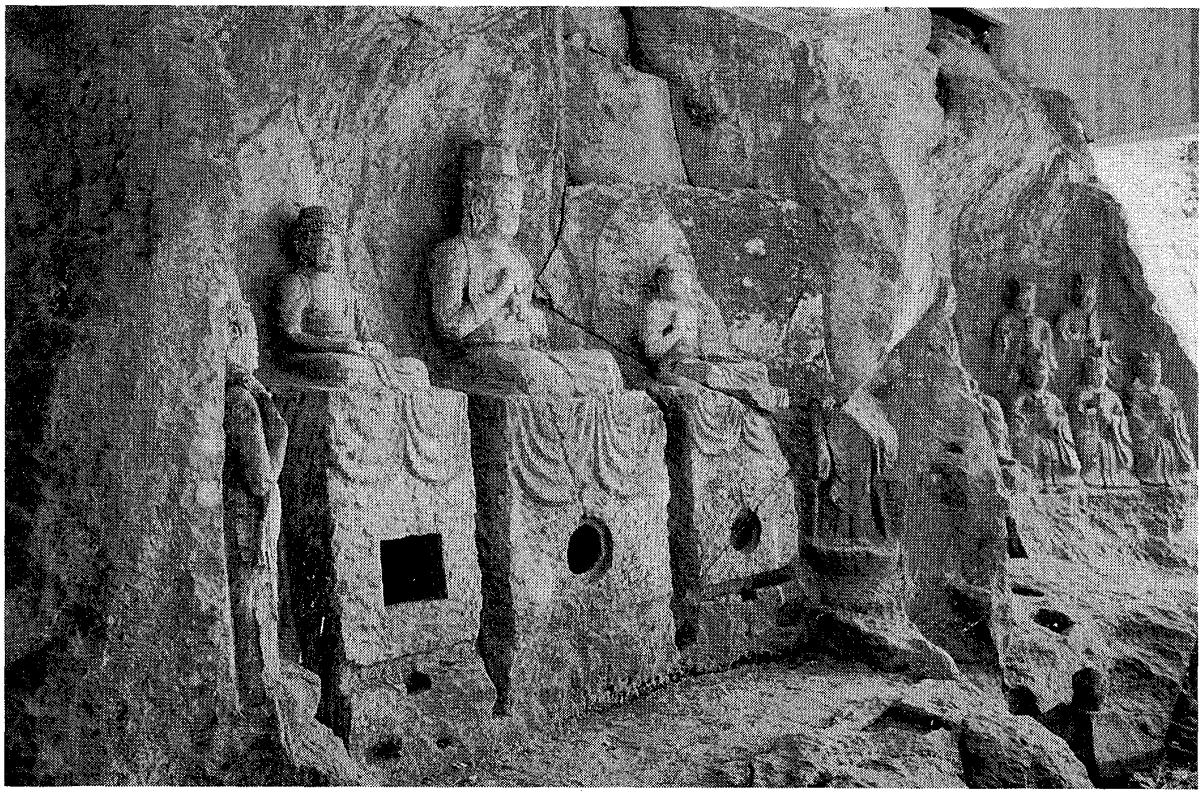

図4　ホキ第1群第3龕

図5　ホキ第1群第4龕

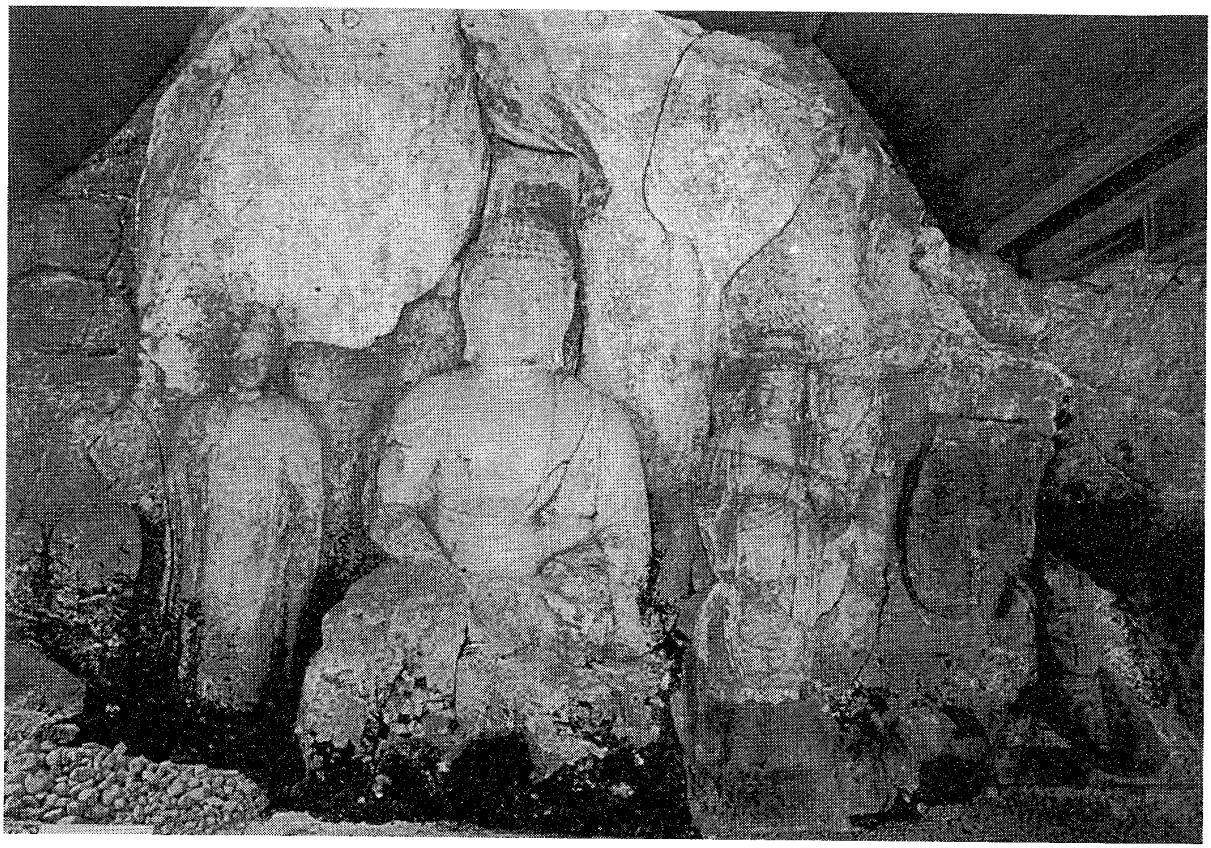

図6　ホキ第2群第1龕

図７　仁和寺阿弥陀三尊両脇侍

図8 中村隆燈氏蔵鏡像

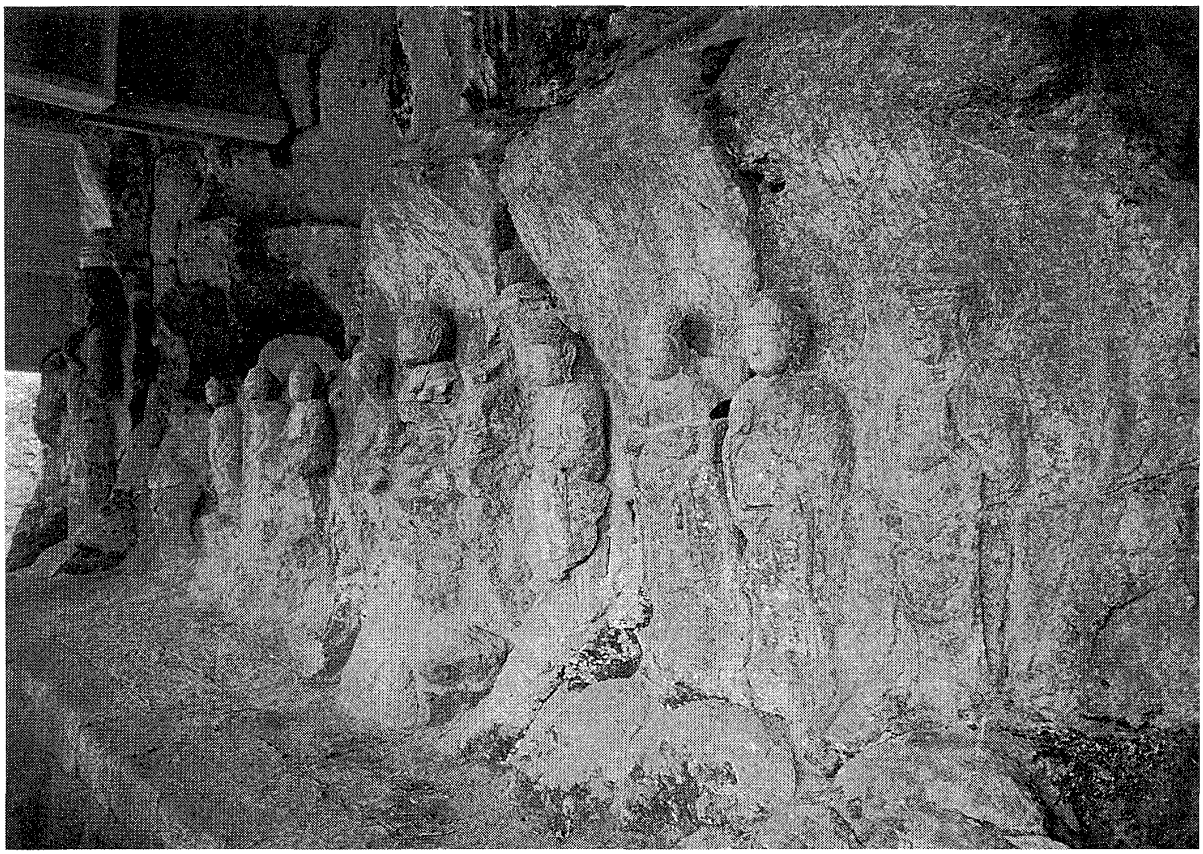

図９　ホキ第２群第２龕

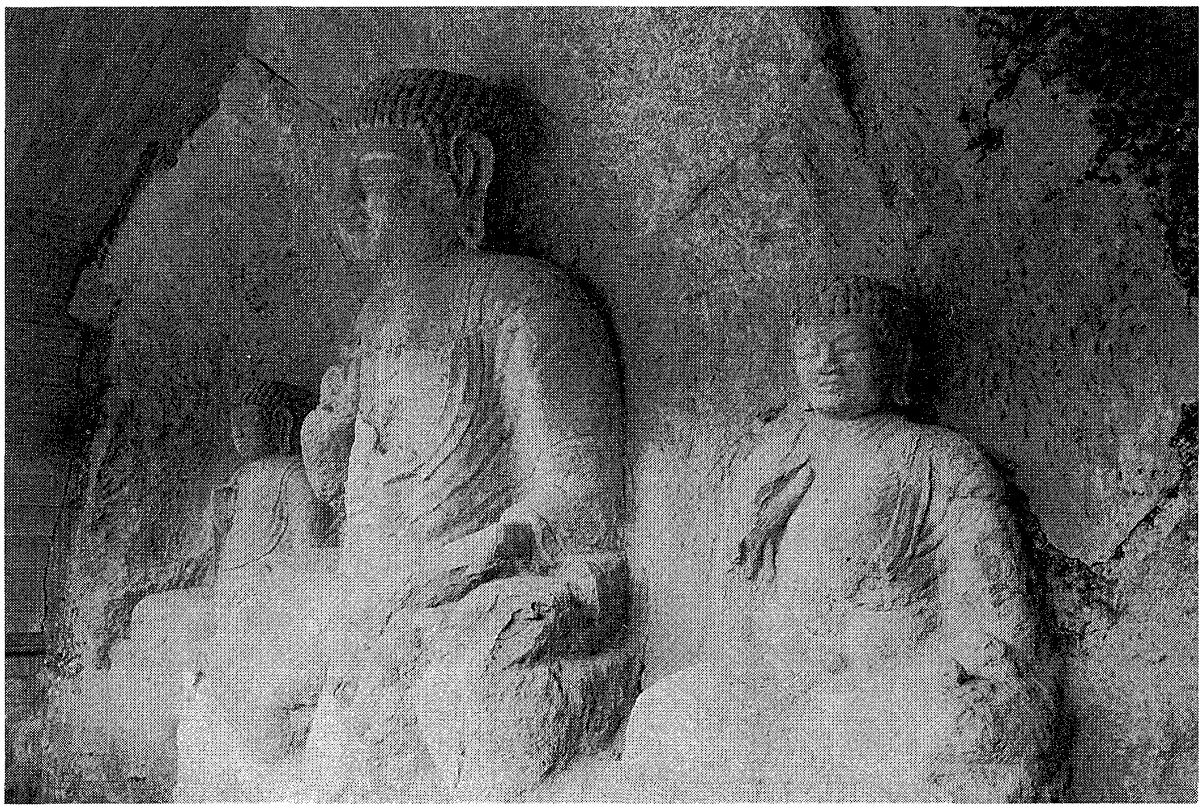

図10　山王石仏

図 11　京都六波羅蜜寺薬師坐像

図 12　山王石仏・中尊

図13　古園石仏

図 14　三千院阿弥陀三尊

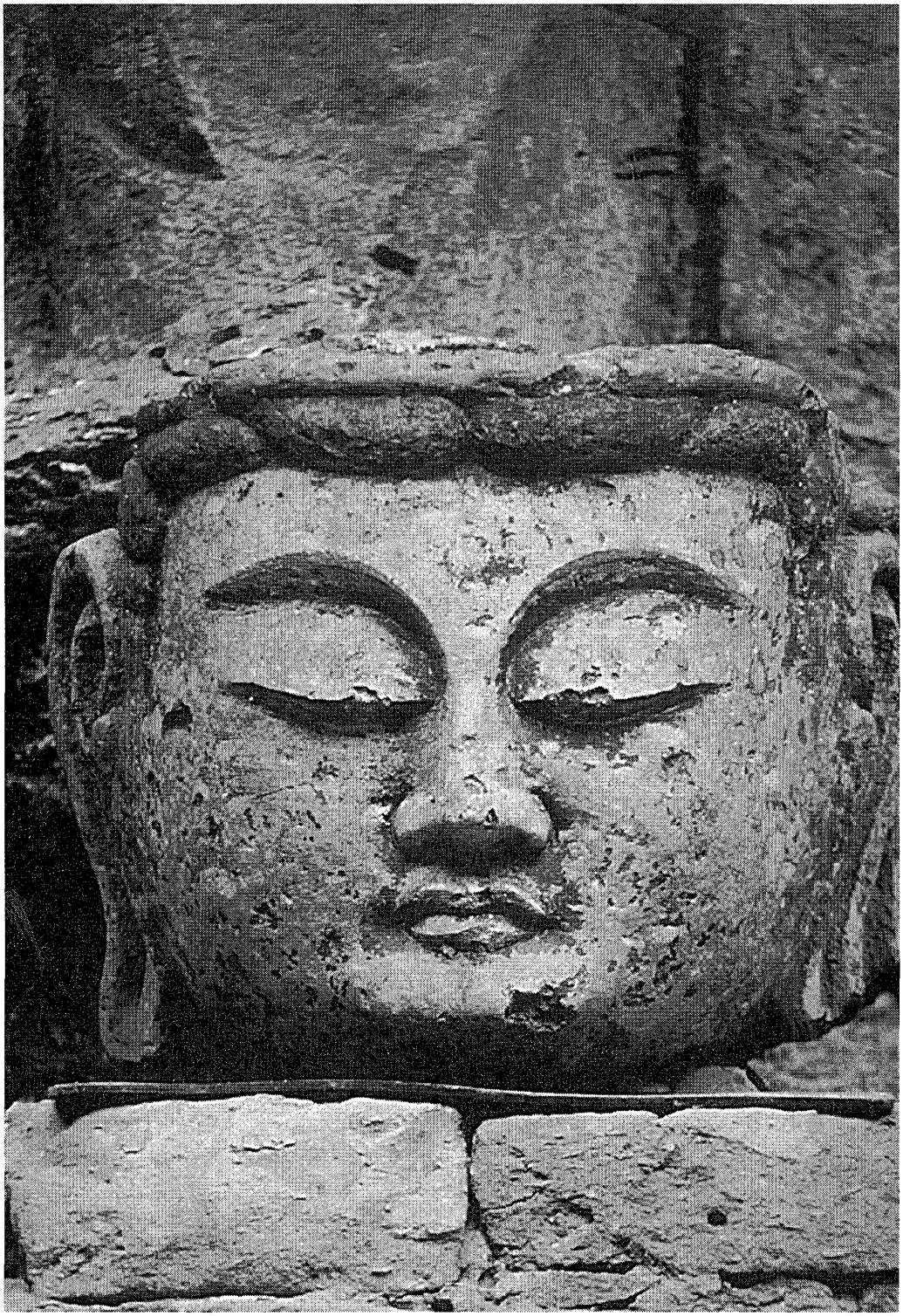

図15　古園石仏・大日

図16　峰定寺千手観音

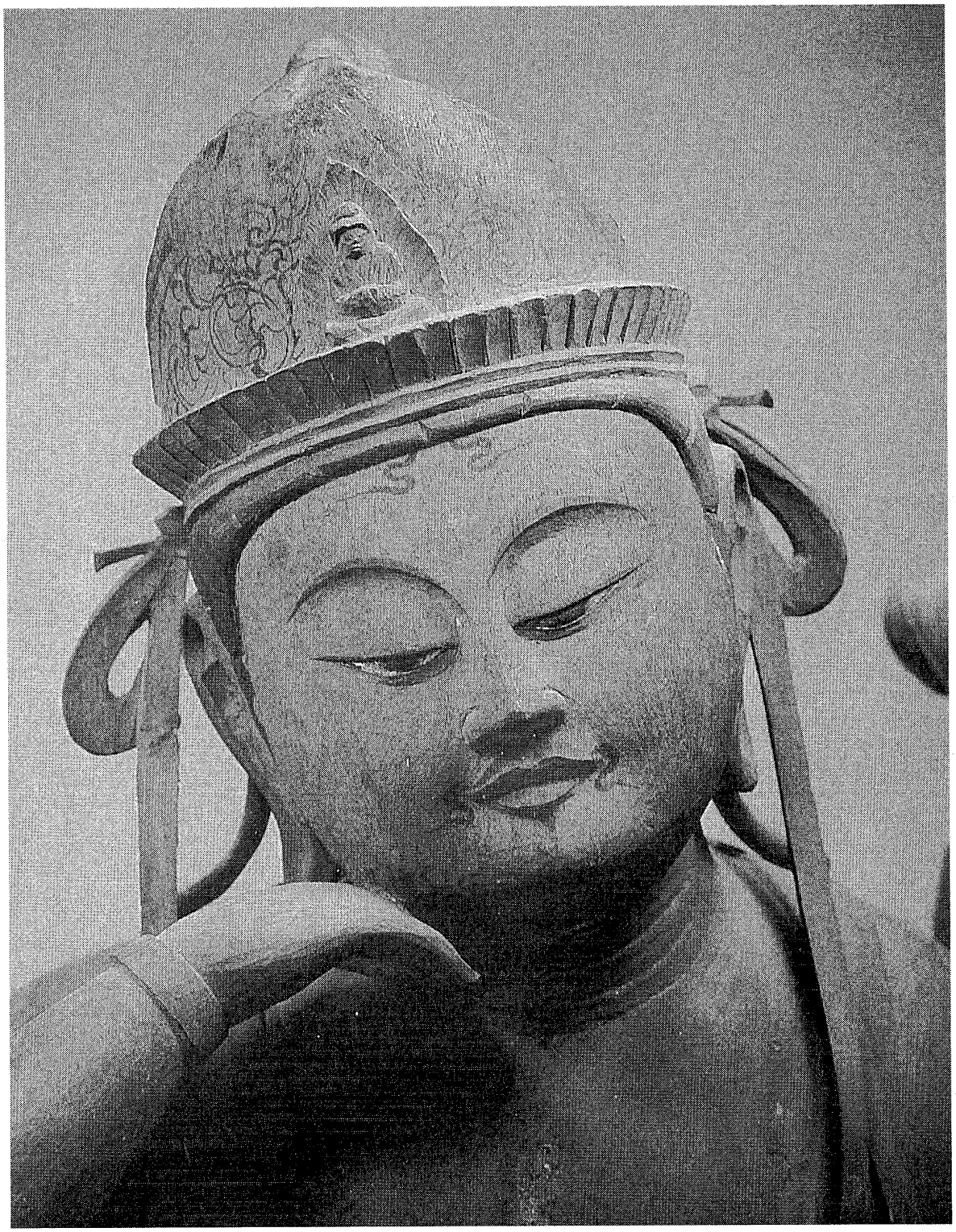

図 17　大門寺如意輪観音

図18　金剛峰寺（旧谷上大日堂）大日